

美紗の会  
たより

この秋は「忍ばずの女」

西松 布咏

「古い話である。」で始まる森鷗外の「雁」。明治三十一年頃の東大生・岡田と無縁坂に住む薄幸の女・お玉の儂い恋物語。女学校時代の愛読書であった。

私の秋はこのページから始まった。  
震災からまだ二ヶ月余の五月半ばに旧友達と池之端の鵜外荘で昼食を囲んだが、たわいない昔話に花が咲いた後、私は一人忍ばずの池畔を散策した。

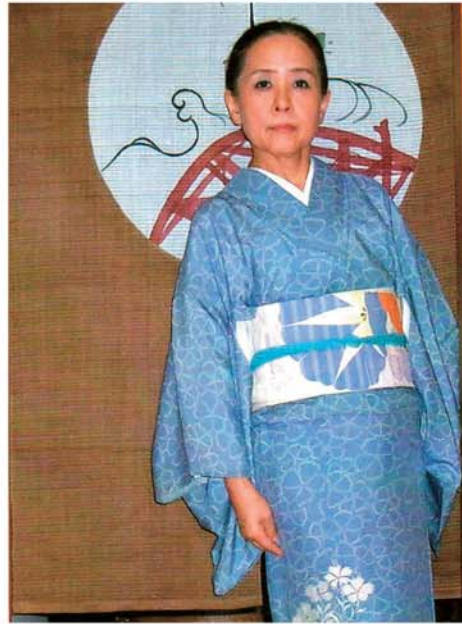
夏のような光が降る運のすがれた池面を眺めながら二十三年前のリサイタルⅢ「哀すれば唄」で演奏した「忍ばずの女」を思い出す。新しい邦楽を発表したいと、舞踊と語りを交え芝居仕立ての作曲にして青山円形劇場で演奏したことを。

十月一日軽井沢・鶴間邸の「第四回薊の会」を依頼された時これを再演したいと共演者の寺田農氏に相談したところ快諾してくれた。

サブタイトルを「忍ぶ恋 あらわれみえたるゆえ 忍ばずの女という」にして新たに取り組んだのだが、そのほとんどが気に入らず改作を重ねた。しかし最後の「忍ばずに生きたかりけり」だけは変えなくなかった。ここにお玉という女の健気な意地を余韻にし、心の叫びとして残したかったから。

お玉を唄ってから二十三年が経ちこの三月に震災を経験したわが身を通して思うことは、必死の覚悟でわが思いを告げようとしたお玉の心が岡田の投じた「石飛礫」でかくも無残に打ち砕かれてしまった・・・誰の罪でもないのに運命のいたずらで。

やはり自然のなせる技になす術を持たぬ人智の限界に儂さを感じてしまうのだ。でも、この世にいる限りはお玉のように「忍ばずに生きたかりけり」と唄い続けて行きたい。



もうひとつの古い話である。

紫陽花が庭いっぱい揺れていた昨年の初夏、江戸時代の縁切寺・満徳寺で私が出演したコンサートにヒントを得た「アジール」京都・東京公演。作・演出・映像の飯名尚人氏がダンスと音楽の新たな関係を多角的にアプローチする作品として震災前からアイデアを練ってきた。「過去は煙。燃えているのは今。私はなぜ逃げてきたのか」

あえて音とダンスを切り離して模索してゆくとの意図で私は東京、ダンスの寺田みさこさんは京都でそれぞれに稽古してきたが、長い時間を掛けてようやく煙草の煙がかたちに顕れてきた。

私は以前から四百年前の吉原の遊女をイメージに唄うよう指示されていたが、段々と具体化してゆき、なんと江戸三大妓女である高尾太夫になるよう望まれた。

「忘れねば思い出さず候かしく・・・」の名文句を残し数々の高邁な男達を翻弄してきた才色具えた松の位の太夫、男が辛い現実を忘れる為に通う遊郭が「アジール」なら、

遊女の「アジール」は煙草の煙。嘘と誠の真ん中を長い煙管をくゆらせながら逃げ続けてきたたたかな女。しかし隅田川で舟遊びの折に、見受けを申し出た伊達綱宗公のうず高く積んだ金子を尻目に「わちきは廓の女でござんす。意地と張りが命でござんす」と、きっぱり拒否し、首をはねられ舟べりに逆さ吊りになって隅田川の水底に沈んでいった。太夫には島田重三郎という深く契った男がいたという。

お玉も高尾太夫も我が恋のため、「忍ばず」に生きたかりけり」を貫いた。  
紅葉燃える秋の深まりゆくなか、女達の声に耳を澄ませて唄いたいと思う。



## 日常を忘れて

杉原 知恵

明日の天気は芳しくないとの予報で重たい気分になっていた。一夜が明け、十月一日の土曜日、東海道・長野新幹線を乗り継ぎ、昼前に軽井沢に降り立った。ホームの階段を昇り、改札からコンコースを通り、タクシー乗り場に出た。快晴だ！澄んだ青空とどっしりとした浅間山がお出迎え、ひんやりとした軽井沢の空気が心地よい。「第四回薊の会」が催される鶴間邸。開演までの時間、周りを散策した。木々は紅葉を始めており、蒲の補が風になびいていた。道端にひととき鮮やかな赤紫の薊の花を見つけた。

こんな軽井沢の秋の気配に満たされた午後、「第四回薊の会」は開演した。

第一部は、森鷗外原作「雁」より「忍ばすの女」。西松布咏師匠による創作曲である。



布咏師匠のいつもと少し違う重い三味線の音色で演奏が始まった。屏風の前の師匠がお玉に変身した。

お玉は困われ者となり、意図せぬ日々を送っている。ふと格子窓から垣間見た青年へ恋心を抱く。無縁坂の忍ぶ恋が始まる。秋立ち初めし夕暮れに、ふと見交わした二人。お玉は忍ぶに耐えぬ女になっていた。

百三十年も前の悲恋物語が、布咏師匠の音域の広い艶やかな声で語られていく。現代版女浄瑠璃のように。素人の私にはどう表現してよいのかわからないのが残念であるが、低音は勿論、艶やかな裏声となる高音はまさに師匠のもの。いつも私の心は鷺掴みにされ揺れる。

第二部の前半は、俳優・寺田農氏の「森鷗外の生涯について」のお話。

鷗外のエピソードの紹介や寺田氏の「忍ばすの女」解釈論も披露され、興味深く拝聴した。

第二部後半は、事前に何の打合せもなく、寺田氏がどう朗読するか布咏師匠は知らず、布咏師匠が三味線をどう朗読に挿入してくるか寺田氏は分からないという、朗読と三味線の即興コラボレーション。朗読は鷗外の「最後の一句」である。鷗外の「雁」や「舞姫」などは私も昔愛読したが、この「最後の一句」は初めてであった。

大阪の居船頭桂屋太郎兵衛が荷主に無断で米を売り横領したという罪で入牢、斬首が決まる。少女いちちは、妹弟と共に「父の身代わり」と申し出る。奉行は、「そうなれば父と対面できぬがよいか」と迫る。いちちは、「よろしゅうございます」と冷やかに答え、少し間をおいて「お上のことに間違ございませんまいから」と言い足した。

緩急自在、抑揚の効いた朗読。それに三味線が挿入され背景、心理描写を形成していく。即興の緊張感の中で「最後の一句」は絶妙な間をもって語り終えられ、私は陶酔していた。

第三部は、懇親会である。まずは寺田氏の音頭で乾杯。お酒を酌み交わしたり、料理を頬張りながらの歓談。今回は、いつもの裏方さんと共にプロの板前さんにもお願



いした由。手の込んだ突出し、美しく盛られたふぐ刺、季節感一杯の料理を堪能した。

いつも美しい奥様ご同伴のS氏、今日は恩師である年配の紳士とご一緒、とても暖かい空気がお二人の周りに漂っていた。ご多忙の中参加された建築家のT氏。その弟子のAさん、次回は新妻ご同道を楽しみにしています。遠方から和服でいらしたTさん、お若いのに自分で着付けなさったそうで、感心しました。舞踊家の先生の立居振舞には、すっかり魅了されてしまいました。毎回料理

が美味しいと仰るIさん、今回もお気に召しましたか。会場は和氣藹々とした中で、熱気さえ籠もっていたが、時間は容赦なく過ぎていった。日常を忘れ、いろいろなジャンルの素敵なた々と同じ時間を共有できた喜びを噛み締めた一日だった。

それでは、次回お目にかかれる日を楽しみに、ご機嫌よう。

## 秋のひととき 江戸唄あれこれ

塚本 陽子

もう二年前になるでしょうか？神田明神の隣にある千代田区指定文化財「神田の家」で、芝居茶屋新日屋が西松布咏さんの演奏会を企画し大好評を博したのは。

今回は、江戸の香りを残す花街神楽坂の老舗料亭「うを徳」で繊細な旬の味と西松布咏さんによる三味線の優雅な音色を楽しみませんか、と「神楽坂うを徳 西松布咏秋のひととき 江戸唄あれこれ」を企画いたしました。

「うを徳」は明治の初めに創業され、今ではミシュランガイドで一つ星に登録されるほどの名店となりました。

初代の萩原徳次郎は侠気と料理の腕前で知られ、明治の文豪・泉鏡花にも大層鼻唄にされて、鏡花の作品『婦系図』では江戸前の魚屋「めの惣」として登場しています。

九月二十三日・秋分の日、秋風が空をひと刷毛しすつきりと晴れわたった午後、本多横町中ほどの粋な黒板塀に囲まれた「うを徳」は、しっとり秋色に包まれ、限定二十名のお客様の為に二階のお座敷を貸し切った贅沢な会が始まりました。

和服をそれぞれ粋に着こなしたお客様は和やかに歓談しながら、豊かに香る松茸のお吸い物と松茸ご飯、季節を先取りしたようにほっこりした揚げ出し里芋、新鮮なお刺身などなど、秋の香りと味覚いっぱいのお席料理の品々に舌鼓をうちました。

やがて、デザートも終わって、ゆっくりと寛いだ雰囲気

気に溢れてゆくお座敷の一角に金屏風と緋毛氈が敷かれ、布咏さんのお鼻唄から贈られた秋の花籠も華やいで、これから始まる演奏への期待で胸が高鳴ります。

そんな中、薄墨色の着物に艶やかな紅葉の柄の帯が素敵な西松布咏さんのお登場。

想う男に秋や桔梗の一枝を恋文に忍ばせる端唄『秋桔梗』が三味の音と共に唄われるとどこからともなくしつとりと秋が忍び寄ってきたようです。

継いで小唄『春浅き』『婦系図』湯島の境内での別れ話の場面が芝居のように鏡花の世界がすると広がってゆきました。

さらに歌沢『海晏寺』あれ観やしゃんせーもみじイがりイ〜で金屏風が紅葉色に真っ赤に染まったようでした。ホールで聴くのはひと味もふた味も違う情緒あるお座敷で聴く、季節の唄。・・・

そして、花街の風情が漂うお座敷に相応しく、新内小唄の『蘭蝶』『仇名草』で終演に。

この日のために選ばれたプログラムは、合間に解説を交えながら全部で十一曲。布咏さんの声にすつぽり



と包みこまれた部屋は江戸情緒に溢れ、瞬く間の七分でした。

落ち着いたしつらいのなかで一葉や鏡花の世界に移ろいながら、端唄・小唄・歌沢・新内小唄の「江戸唄あれこれ」で、美しい日本の四季を感じ、日常を忘れる秋のひとときでした。

## つかず離れずのぜいたく

小岩井 忠道

うだるような暑さで連日寝不足気味の七月一六日、神田明神・明神会館内で開かれた「江戸唄と落語を楽しむ〜江戸夏粋賑々〜」を堪能させていただきました。布咏さんにお近づきになれたのは、前号に「日本人による『思いやりと覚悟を』』という格調高い文を寄せられていた旧友、軍司達男氏の紹介がきっかけだ。氏は二十年來の関係を書いていたから、当方も相当、長い間、お付き合い願っていることになる。鑑賞させていただいた演奏会も数多い。古典に限らずさまざまな領域の芸術家と競演しているのに驚嘆したこともしばしばだ。

平成十八年十二月の「セルリアンタワー能楽堂五周年記念公演」語り・舞・能舞・馬場あき子による橋姫の世界」は、布咏さんが作曲、唄、三味線を担当した舞に加え、女流義太夫界の重鎮、竹本朝重の語り、シテ、津村禮次郎による能舞という三様の「橋姫」競演が楽しめる豪華な催しだった。観客席で目にした多田富雄氏は本業の免疫学だけでなく、新作能の作者として知られる。車椅子生活を強いられる氏にとっても見逃せない舞台だった、ということだろう。それ以前に何度か舞台や研究業績に触れることがあった朝重、多田氏ともその後、亡くなられたのは、なんとも残念だ。

明神会館での「江戸唄と落語を楽しむ〜江戸夏粋賑々〜」では、布咏さんの江戸唄をたっぷり一時間楽しませていただいた。布咏さんの芸域の広さは、あらためていうまでもないが、筆者のような万年初心者は、小唄、端

